博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	峰尾　公也
論　文　題　目	ハイデガーと時間性の哲学――根源・派生・媒介

審査要旨

本論文は、マルティン・ハイデガーの哲学を「時間性 Zeitlichkeit」という主題への一貫した取り組みとして明らかにし、この哲学がいかなる未解決の問いを内包しているのかを浮き彫りにする試みである。「時間性」の問いは、ハイデガーが第一の主著とされる『存在と時間』（一九二七年）およびそれに続く時期の講義・著作・論攷において提起した問いであるが、この問いをめぐる探究をハイデガー自身が未完成のままにとどめてしまったという経緯も相俟って、研究者のあいだでは現在に至るまで錯綜した解釈状況が続いてきた。本論文の筆者は、この錯綜の原因が、ハイデガーが「根源的で本来的な時間性」と呼ぶものと、そこから隙間なしに派生するとされる諸契機、すなわち歴史性および時間内部性とのあいだの錯綜した関係にあると想定する。まず、第一部第一章・第二章においては、この根源／派生関係に潜む問題に接近すべく、『存在と時間』における「時間性からの時間内部性の派生」および「時間性からの歴史性の演繹」の再検討がなされるとともに、時間性から時間内部性・歴史性への「隙間のない派生」において脱け落ちてしまうもの、すなわち自然的時間や根源的歴史性が、時間性の哲学の構成においていかなる役割を果たしているのかが問われる。次に、第一部第三章においては、ハイデガーが『存在と時間』刊行以後、一九二〇年代末までに展開した時間性の哲学の深化のあり方が検討される。ハイデガーはこの時期に時間性とは異なる水準に置かれた「時性」の問題圏に探究の歩みを進めるが、この時性という現象と、それとは実際には重なり合わない時間性の現象とを併せて、最終的に、同じ単一の根源へと根付かせようとする。本論文の筆者は、ハイデガーがカントから引き継いだこうした根源的時間の単一性のうちに伝統的な時間理解の継承を見てとり、さらに、時間とは直接にはかかわりのないもの（自然や言語）が時間性という単一の根源のうちに包含されていると指摘している。

ハイデガーによるこのような「時間性の哲学」の構成および限界をふまえ、本論文第二部は、三人のフランスの哲学者、エマニュエル・レヴィナス、ポール・リクール、ジャック・デリダにおけるハイデガー哲学との対決のありようを追跡している。三者の解釈はいずれも、第一部において浮き彫りにされた根源的なものと派生的なものの関係をめぐるアポリアに立ち返ることから出発し、ハイデガーの時間性の哲学において十分に展開されていない根源的歴史の生起をめぐる思考の可能性を提示しようとしている。第一に、レヴィナスは、他者との対面的な関係に着目することで、そこに存在論的な次元に先立つ根源的歴史（倫理的な次元）の生起を見出す。第二にリクールは、時間性から通俗的時間概念を一方向的に派生させることの失敗を指摘し、歴史性が、物語的統合形象化の作用によって両者を「媒介」しているという解釈を提示する。第三に、デリダは、ハイデガーが時間性から歴史性を「隙間なし」に派生させることで、根源的歴史性の生起をそのものとして分析することが不可能になっていると指摘する。そしてこの根源的歴史性の生起を、『存在と時間』のなかに見出される「自己伝承」という契機に送り返すことで積極的に意味づけようとする。さらに彼は、根源と派生の区別そのものを問いに付し、この根源的歴史の生起を「差延」という語で言い表そうと試みる。

以上のような内容をもつ本論文に対し、公開審査会に際しては、本論文が「時間性の哲学」の構造と限界をきわめて明快に整理するとともに（審査委員のひとりは本論文を、従来の「内在的解釈に偏するハイデガー研究」に対する大胆な挑戦と評した）、最新の二次研究を意欲的に参照し、さらに近年になって刊行されたジャック・デリダの講義録をも読解している点でオリジナルな価値をもつとの評価がなされた。質疑応答においては、本論文が分析の基本的な枠組みとして準拠している「根源」「派生」「媒介」という三つの概念の連関について、より慎重な取り扱いが必要であることが指摘された。とりわけ、根源的なものと派生的なものとの関係が生じさせるアポリアに関しては、本論文では、ハイデガーにおける等根源性という着想を徹底させ、等根源的なものとみなしうる各項（時間内部性・歴史性・時間性）を媒介することによりアポリアを解決するという方向性が提示され

氏名　峰尾　公也

ているが、ここで用いられている「媒介」という概念は、それじたい論文第二部第二章において検討されるリクールの思想からとられたものであり、こうした手続きには問題がないわけではない。また、審査委員からは、ハイデガーが根源という概念を使用する際に念頭に置いているフッサールにおける根源概念との差異を明瞭化すること、そして、現象学における志向性概念とハイデガーによる時間性の哲学のあいだの連関についてさらなる考察を行うことが求められた。別の審査委員からは、根源を「可能性の条件」と同一視ないし混同するハイデガーの思考の傾向に対し、十分に距離をとり、批判的な視座を確保する必要性があったのではないかとの意見も提出された。さらに、筆者が言及している根源的歴史性の概念をめぐって、その具体的内実が示されるべきとの指摘もあったが、これに対して筆者は、記号・言語の産出の可能性のことであると回答した。本論文はハイデガーおよびフランス現代哲学の基本的な著作に関して、今後の研究が参照すべき重要な解釈を提示しており、このことから審査委員会は、委員全員一致で本論文の筆者である峰尾公也氏に対して博士の学位を授与することが適当であるという判断に至った。

公開審査会開催日	2018 年　　6 月　　18 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	西山　達也	哲学	博士（ストラスブール大学）
審査委員	早稲田大学・名誉教授	佐藤　眞理人	哲学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	藤本　一勇	哲学	
審査委員				
審査委員				